

銀賞

設備管理で大切なこと

富士フイルム株式会社 神奈川工場 メディカルシステム開発センター

露木 竜秀

もう 15 年以上前になる。私は製造部門に異動して、クリーンルーム全体の空調設備管理を受け持つことになった。しかし、私にとって設備管理は初めての仕事だったので、本当に大切なことは、まだわかっていなかった。

動力室にある設備は、初めて見るものばかりだった。モータの音や弁が開閉する音、大量に空気を流す風切り音など、隣の人声を聞き取るのにも苦勞するほど大きな音に包まれていた。

そんなある日、上司の Y さんが動力室に入ってきた。

「露木くん、ここにいたんだ」

と言うと、動力室の通路を歩き始めた。後をついて行くと、

「ここに来て、なにかわかったか？」

と私の耳元で聞きだすように言った。

「いえ、なにも」「でも、音が大きいですね。長時間は居られませんね」

と、当たり障りのない返事しかできなかった。

それから 2、3 歩あるいたとき、Y さんが、排気用のモータの前で立ち止まった。私は、モータを見る Y さんの姿を見ているだけだった。Y さんは、振り返りざまに

「わかるか？」

と聞いてきたが、私にはなんのことかわからなかった。それはモータのプーリに取り付けられたベルトから出ている音のことだった。よく聞けば、他のモータの音とは違う音だが、聞く気が無ければ気付かない、そんな違いだったように思う。

Y さんは、プーリのカバーをそっと外して、内部の黒い粉を指さした。

「ほら、ベルトが削れてたくさんのカスが出ているだろう」

そこにはたくさん黒い粉があった。

「早メシ食って、昼休みに集合な！」

と言うと、黒い粉だけをはたいて、カバーを戻した。

Y さんは、昼休みにモータを止めてベルトを新品に交換し、指でベルトをグッと押してテンションを確認すると、

「こんなもんだ」

と、一部始終を私に見せていた。また振り返りざまに、

「わかったか？」

と聞かれたので、

「ベルトが削れていたんですね」

と見たままを答える。

「で？」

とつこまれたが、なんのことかわからず、口ごもってしまった。

「さっき、音の違いに気付いただろ？」

「ただ見ているだけじゃ、カバーに隠れた異常は見付けられないよ」

「音の違いに気が付いたら、なぜだろうって思わなきゃ」

「あ、その前に、音が違うことに気が付かないとダメだけどね」

「もう、わかるね」

矢継ぎ早にそう言うと、私の肩をポンと叩いた。

動力室から出ると Yさんは、青空を見上げながら、

「回転している物に手を入れちゃダメだよ」

「それと、製造しているんだから、その装置をいつ止めるのかを製造グループに聞かなくちゃダメだよ」

と言うと、私の顔を見てニッコリと微笑んだ。

「でも、露木くんが動力室に足を運んでくれていたから、オレもきたんだ」

「こうして、異常を早く見付けられるとうれしいよな」

「これからもしっかり見てくれな」

自分は何にもできなかったのに、なぜかうれしかった。それからは、まるで宝物を探すかのように、設備の陰をのぞいたり、音に敏感に反応するようになっていた。

「Yさん、ちょっと見て下さい」

と言えることがうれしかった。

Yさんは周りからは『細かい人』と言われていたが、私には、

「仕事のプロとしての行動なんだな」

と思っていた。

「どうしろ、こうしろ」

とは言わなかったが、1つひとつの行動が、私に大切なことを教えてくれたのだと思う。

設備管理で大切なことは、『自らが設備の特徴やくせをよく知り、見て聞いて感じて、不調が故障になる前に見つけて対策するのだ』と、教わった気がする。

あれから 15 年、すでに Yさんは定年されたが、『こういう人になりたいな』と、しばしば思い出すときがある。未だ未熟な自分を見つめながら――。